

柘植久慶

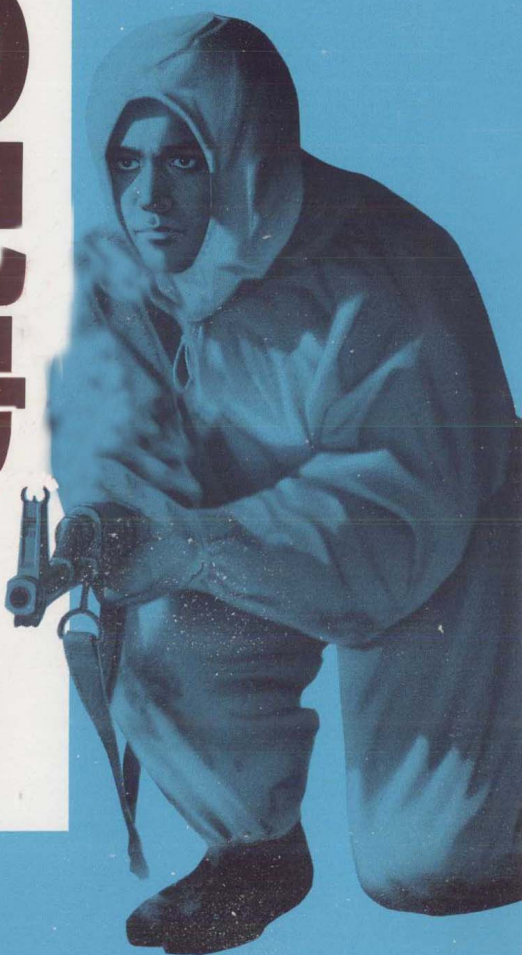
ゼロの記号

ゼロ



# 零<sup>ゼロ</sup>の記号

柘植久慶



零の記号

一九八七年九月二十五日 第一刷発行

定価 九八〇円

著者 柘植久慶

装丁者 石川 俊

発行者 堀内末男

発行所 株式会社 集英社

東京都千代田区一ツ橋二一五一一〇  
郵便番号 一〇一

出版部 (〇三) 二三〇一六一〇〇

電話 販売部 (〇三) 二三〇一六一七一

製作課 (〇三) 二三〇一六〇八〇

印刷所 中央精版印刷株式会社

検印廃止

乱丁・落丁本が万一ございましたら小社製作課宛  
にお送りください。送料は小社負担でお取り替え  
いたします。

本書の内容の一部または全部を無断で複製、複  
製、転載することを禁じます。

## 目次

|     |     |           |      |           |      |         |       |
|-----|-----|-----------|------|-----------|------|---------|-------|
| 7   | 6   | 5         | 4    | 3         | 2    | 1       |       |
| 脱   | 凍   | マリノフスキー基地 | 装備集結 | ロシア語会話の教師 | 潜入計画 | 消えた情報部員 | プロローグ |
| 出   | 傷   |           |      |           |      |         |       |
| 121 | 102 | 85        | 70   | 51        | 33   | 16      | 5     |

|    |          |
|----|----------|
| 8  | ダマンスキー大尉 |
| 9  | 中央突破     |
| 10 | キタキツネの道  |
| 11 | 帰還       |
| 12 | 形状記憶合金   |
| 13 | 諜報網      |
| 14 | 対決       |
|    | エピソード    |

256 238 219 209 195 180 162 138

零<sup>ゼロ</sup>

の

記

号



## プロローグ

「あと三十分ほどです」

と、狭い装甲兵員輸送車のなかで一人の将校が言った。

「それにしても暑いな!」

話しかけられた上官が、不機嫌そうな口調で応じる。

階級章は、赤地に太い金線が二本、縦にくっきり入っていた。ソ連陸軍の少佐だ。

最初に口をきいた方は、赤地に細い金線が縦に二本、それに四個の金色の星が見られる。こちらは大尉である。

BTR-70装甲兵員輸送車であった。乗員二名に兵員を十四名搭載が可能だ。ソ連軍がもっとも大量に使用するBTR-60の改良型で、出入口のハッチがそれよりも少し大型になっている。居住性はよくなかったが、走行性は満足できた。

「窓を開けましょう」

二人の会話を聴いていた軍曹が、気をきかせて銃眼の部分を開く。

かなり風が吹きこんできた。だが敵弾が飛びこみにくくなっているだけに、車輛内部にいる全員の体感温度を下げるまでにはゆかない。

ミハイル・セルゲイヴィチ・ロマノフ大尉は、陽光が照りつけ白熱している山肌を、狭い銃眼から眺めていた。道路の向うに、同じような山肌が続いているのが見える。



一瞬、百メートルほど向うの岩山が光ったように感じられた。さらに続けて幾つか閃光が走り、白煙が立上った。

——対戦車ロケットだ！

ロマノフ大尉はそう思った。だが声にならない。

彼は鋼鉄の壁へしたたか後頭部と背中をたたきつけられた。

太陽を一度に数十個集めたかのような、今まで経験したことのない明るさを感じたのと、殆んど同時だった。がくんと前のめりになる恰好で、車輛が停止した。

——痛い……。

その眩きが「熱い！」に変わる。運転席が炎上し、前方に坐っていた数名の兵士にも、いつしか火が燃え移っていた。

「少佐……少佐！」

と、ロマノフ大尉は傍に倒れている上官に声をかけた。

誰かが後部の脱出用扉を開く。地獄のような熱気が少しだけ解決できた。

「大尉どの、脱出してください——」

声の主を視たが、爆風で煤けていて誰だか判別できなかった。どうやら軍曹らしい。

激しく銃撃されていた。土砂降りのような窓に吹きつける雨滴の感じで、装甲兵員輸送車の装甲を銃弾がたたいてゆく。装甲の弱いところから、一発二発と弾丸が貫通してくる。

反撃していた煤けた軍曹らしき兵士は、十秒と生きていなかった。頭部を射抜かれ、棒を倒したように後方にひっくり返る。

ロマノフ大尉は手近のAKS-74突撃銃を手にとると、辛うじて脱出口から転げるように地上に落ちた。体勢をたて直すと一目散に目標にした岩陰に向う。

一連射されただけで、彼は遮蔽物の蔭へと転がりこめた。彼はそれから二度位置を変え、一応は四方から身を隠せる恰好になった。

ちらりとあたりを視る。先頭を走行していたジープは、路肩から外れて炎上していた。

二番目のアフガン政府軍將兵を乗せたトラックは、ほぼ中央に直撃弾を喰って、道路を塞ぐように停止している。一人として生存者はいなかった。

大尉たちの乗っていた装甲兵員輸送車が最後尾にある。火が全体を包み、何だか失火し燃え上ったマッチ箱のように見えた。

——お、俺だけが……！

手にしたAKS—74突撃銃の安全装置を外し、半自動に切替えながら、ロマノフ大尉は舌打ちした。新任の少佐にせがまれ、担当戦区をパトロールしたらこの有様だった。つい一か月ほど前、そのあたりは完全に制圧したはずであった。にもかかわらず地から湧き上ったように、強力なゲリラの集団が攻撃してきたのだ。

黒煙が岩だらけの地面を這い、ゴムの燃える特有の臭いに混り、死体の焦げる悪臭がしてくる。幾度体験しても耐えがたいものだ。胃にちゃんとした内容物があつたとしたら、たちどころに吐いてしまいうさだった。

機銃弾が火に焙られ、豆が弾けるような音をけたたましくたてる。ときおりそれに大口径の砲弾の爆発する音が混った。

「神よ、偉大なれ！」

歓声が岩山に響いた。やがてその声が急速に接近してくる。

紅く塗られたプラスチック製の弾倉を、ロマノフ大尉はズックのショルダーバッグから取出してみ

た。六個ある。

——これでどれだけ戦えるのだろうか？

彼は慌しく視線を周囲に走らせた。何一つ見えない。だが声だけは確実に近づいてきていた。

いきなり真正面の岩のところに、青緑色のターヴァンを巻いた男が、ちらりと姿を現した。岩山から岩山を身軽に移動してきたのだ。

ロマノフ大尉は続けて三発、引鉄を絞り落した。それより先に人影は消えている。

今度は左手十時の方向に、二人ほど駆けてくるのが捉えられた。彼は銃口を向けた。しかし直ぐ見えなくなった。

——畜生！  
スカタイナ

舌打ちをして、彼は吐き捨てる。顔面が緊張のために震えた。止めようとしても、意思どおりにならなかった。

短く空気を裂く音がした。途端に彼のすぐ左の地肌が金切声を上げ、そこに黒い焦げ跡をつくる。

——後方か！

転がりながら彼は、背後へまた三発、間髪入れずに発砲した。

それから暫く沈黙が続いた。中天にある太陽を遮ぎるものを、ロマノフ大尉は何一つ持合せていなかった。

喉が乾いてきた。それに加えて焼けた死体の臭いが、彼に絡みつき始めている。風があまりなく、そのため付近一带に拡散されることなく漂っているのだ。

水筒を失ってしまった装甲兵員輸送車を、彼はうらめしそうに一瞥した。対戦車ロケット弾が、斜め前方からその運転席を捉えていた。中国製の RPG-7 だった。

——中国の奴ら……！

アフガニスタンは狭い回廊のような感じで、中国と国境を接している。そこからアフガン・ゲリラに武器が送りこまれてくることは、公然たる事実になっていた。

ロマノフ大尉はわずかな希望を抱いて、上空をずっと見渡す。そこには抜けるような青空があった。二条の飛行機雲が、かなりの速度で北上しているのが認められた。その先はソ連領であった。

——誰か、誰かきてくれ……。

弱く彼は呟く。装甲兵員輸送車が、小爆発を起した。空気が震動し、それが彼の肺のなかまで伝わってきた。

周辺全体から再びまた歓声が上った。数は先刻より確実に増えていた。

接近してくる足音がはっきり聴こえてくる。あらゆる方角からしているように思えた。

——降服。<sup>カピトゥレーション</sup>

この言葉が彼の脳裏をたった一瞬だが横切った。だが噂ではゲリラに捕えられた者は処刑されると言われていたので、すぐに考えを打消した。

ロマノフ大尉はF—1手榴弾を手にする。ピンを力まかせに引抜き、一番脅威を感じている背後に投げる。快い音が生じ、安全把が空中に弾んだ。均一に破片が飛散するようつけられた手榴弾の刻みが、彼の掌にしっくりと感ぜられた。

四秒ほどした。小さな爆発音が起こり、それを境として恐ろしい沈黙がやってきた。物音がなに一つしなくなる。

車輛の燃えている音だけが、わずかに彼のところまで届いた。

「降服しろ。仲間たち、みんな死んだ。残ったの、おまえだけだ——」  
抑揚の全くない、たどたどしいロシア語が投げかけられてきた。

「……………」

彼は無言でいた。迷いが生じてくる。捕虜としての苦しい生活が思い浮んだ。それを必死で打払った。  
——地獄へ落ちろ！

大声で叫んだ彼は、立上るなりAKS—74突撃銃を連射した。軽快な発射音と、五・四五ミリ弾の小さな葉莢が岩肌にはねる音が、立続けに響く。

少年時代に、祖母の故郷であるルヴォフを訪れた日のことを、何故か彼は思い出した。

見渡す限りのヒマワリ畑が広がっている。突然、黄一色の視野が、紅く染っていった。

衝撃に耐えられず、彼の軀は大きく傾く。三十歳になったばかりのソ連陸軍大尉は、自分の回想のなかのヒマワリ畑に倒れこんだ。

十数名のアフガン・ゲリラの戦士たちが、岩蔭からゆっくりと姿を見せた。

周辺を警戒する者、空襲に備える者、そして死体の点検に当る者と、彼らは手際よく各人の仕事に取りかかった。

「こいつは何も持っていない！」

と、装甲兵員輸送車の方から報告する声がした。

煤けた顔をした軍曹の死体を点検していた戦士からだった。

「だが、こいつは持ってるぞ」

今は死体となったミハイル・セルゲイヴィチ・ロマノフ大尉のポケットを探っていた、眼鏡をかけた戦士が嬉しそうに叫ぶ。

「しかも……将校だ！」

将校なら何かしら重要な書類があるので、という期待感からである。

「モハメド、階級は……？」

一段と高いところで四囲を見ていた、指揮官が歩み寄りながら訊いた。

「大尉……ミハイル・セルゲイヴィチ……ロマノフ。ロシア皇帝の子孫みたいな姓だ……」

「大尉か——」

「スペツナズだと……ソ連軍の特殊部隊の将校なんだ、こいつは！」

モハメドは目前にある死体の顔を、もう一度じっくり視る。血の気がなくなっただけで、肌の色がやや濃いように感じられた。坐っていた場所がよかったのか、顔は殆んど煤けたりしていなかった。

「その死体だけは運ぼう。丹念に点検してみようじゃないか」

と、指揮官がそう促した。

「AK—47が十一挺、AKS—74が三挺。AKMが三挺。弾薬は両方併せて三千発と少し。他は破損がひどく使いものにならない」

先頭のジープとトラックのあたりから、捕獲武器の報告があった。

手にしていた身分証などを自分のポケットに納めると、モハメドは若い戦士に死体を運ぶよう指示した。

彼らアフガン・ゲリラの戦士たちは、岩だらけの山道を早足で歩く。ソ連軍のヘリコプターがやってこないうちに、基地に戻る必要があるからだ。

「ロシア人も死ぬと天国の楽園に行けるんだらうか？」

死体を運んでいた戦士が、怪訝そうに傍を歩く壮年の戦士に訊ねた。

イスラム教徒たちは、聖なる戦いに従軍して、死ねば豊かな水と緑の美女が侍る楽園で暮らせるとい

う。

「いや、共産主義者たちに天国はない。魂は救われないだらうな……」

「だがね、思ったより静かな顔で死んでる。まるで俺たちの楽園にたどり着いたみたいだ」

「あれは国後島だ。何とかあそこにこの船を接岸させよう」

白髪ちやうびの年輩者が叫んだ。船長の前田だった。彼は戦前、国後島に住んでいたことがある。終戦のとき乳呑路ちゅうのみぢ国民学校六年生だった彼は、この島について知りすぎるくらい知っていた。

船は揺れに揺れている。黒い雲がいまにも手が届きそうなくらいまで、低く近くたれこめていた。それが猛烈な速さで流れ去ってゆく。

「無線が駄目です。修理できそうありません」

中年の無線士が絶叫した。その語尾が消えていた。激しい風雨と海鳴りが、会話を途切れさせる。

——舵かじがきかん、畜生……！

前田船長は苛立いらだちって吐き捨てた。目前に海岸が拡ひろっていたが、少しも近づかない。

国後島の泊村東沸にある瀬石海岸に違いないと、彼は信じている。海岸から少し沖合にある海中からそそり立った岩は、ロウソク岩と呼ばれる岩礁だ。遠足に來たこともあったから、見間違まちがいはないはずであった。

——一体、何時間になるだろう。こんなひでえ時化にぶつかるなんて、ついてねえな！

操舵をあきらめた前田船長は、ただ前方を見つめていた。島影は激しく前後そして左右にと移り変わる。甲板員の大城吾郎は、船内で幾度も全身をぶつける。真直ぐに立っていること自体が不可能だった。

もう二食も食事抜きであった。空腹は少しも感じなかったが、疲労は着実に時間が過ぎた分だけ覆いかぶさってきている。

「もう駄目かもな——」

と、藤村という甲板員が呟く。

「何とかあの島まで行き着けたらな。そしたら助かる」

大城は船窓から国後島を一瞥した。先刻より心なしか接近していた。

「おい、近づいてる！」

思わず彼は叫ぶ。船窓に鼻先をこすりつけていた。

「と、とんでもない。収容所だぜ、国後なんか漂着したら……」

「避難だよ、緊急事態のな」

「だったら還してもらえるか？」

「そのはずだ、幾ら奴らでもな……」

風向きが急に変る。一層のこと風雨にかすんだ島が近くなっていた。

突ったった感じのロウソク岩が、その海面に近いあたりを波で白く装飾されたように見えた。

——生残れた、俺は……。

そう思った途端、大城吾郎は気が遠くなっていた。

柔かな陽射しが窓から射しこんでいる。それが大城吾郎の顔を照らした。

揺れはもう全くなかった。風の音も何もかも聴こえない。静寂の世界に彼はいた。

——一体全体、俺は何時間眠っていたんだろうか？

彼は手で軀をささえると、やっとのことで立上った。傍の藤村はまだ死んだように眠っている。

大城は痛む背中をかばいながら、船の甲板に出てみた。穏かな海があった。振返ってみると、左手にロウソク岩が聳え、右手に海岸が続いていた。

——こんなところに座礁したのか。

思わず彼はそう声に出して言った。百トンほどの船は、岩と海岸のあいだに乗りあげた恰好になっていたのだ。



突然、何か所かで海面が割れた。真黒な鉄の塊が浮上してくる。

その周辺が泡立った。と見る間に小さな司令塔らしきものになり、続いて小型潜水艇の形を捉えることができた。

「な、何が出てきたんだ……」

大城の後方で誰かが叫んだ。気がついた人間が他にもいたのだ。

——ソ連の小型潜水艇だ。スウェーデンや津軽海峡に出没した、キャタピラ付のやつだ。

彼は瞬き一つせず、目前で展開される光景を見つめていた。

波打ち際まできたとき、小型潜水艇は停止する。ハッチが開き、そこから完全装備の兵士が各二名、出てきて上陸していった。

潜水艇はまた泡を大きく吐き出し、方向を転ずると海中に没した。

——上陸作戦だ。それも極秘の小人数による敵地への潜入だ！

五隻の小型潜水艇からの十名の将兵は、素早い動きで砂浜を進んだ。ときおり伏せては前方の様子を窺い、また行動を続ける。

一人の兵士が、ふと振向く。彼はロウソク岩のところに漁船らしい船が一隻、漂着しているのを見つけた。

「中尉<sup>ミッドウィッチ</sup>どの、船です。日本の漁船があんなところに！」

声を発せずに行動する訓練だったことから、指揮官の中尉は命令に背いたその兵士を睨みつけた。だが「日本の漁船」との言葉に、今度は表情を変えた。

伏せたまま上半身を捻るようにして、中尉は双眼鏡で視る。白い船体の船首のあたりに漢字で、〈第三十八国後丸〉と記されてあった。

さらに転ずると、甲板から操舵室のあたりにかけて、数名の人影が認められた。